第３回　小牧市地域包括ケア推進計画策定委員会　議事録

日　　時	令和５年５月２５日（木）　午後１時３０分～３時
場　　所	小牧市役所　東庁舎　５階 大会議室
出 席 者	**【出席委員】（名簿順）** 長岩　嘉文　　日本福祉大学中央福祉専門学校 校長 前川　泰宏　　小牧市医師会 理事 石田　幸大　　小牧市薬剤師会 永平　美奈子　　小牧市介護保険サービス事業者連絡会（居宅介護支援部会） 江口　はづき　　小牧市介護保険サービス事業者連絡会（施設部会） 河内　宏一　　小牧市リハビリテーション連絡会 小木曽　眞知子　障がい福祉相談支援事業所 三嶋　直美　　南部地域包括支援センター 管理者 田中　秀治　　小牧市社会福祉協議会 事務局次長兼在宅福祉課長 鳥居　由香里　　こまき市民活動ネットワーク 副代表理事 大野　徳一　　区長会連合会 連合副会長（巾下地区） 小林　静生　　小牧市地区民生委員・児童委員連絡協議会 篠岡地区会長 鈴木　久代　　学校教育課 指導主事 橋本　牧男　　公募委員 山本　菜々美　　公募委員 **【欠席委員】** 佐々木　成高　　小牧市歯科医師会 副会長 **【事務局】** 小川　真治　　福祉部 次長 西島　宏之　　地域包括ケア推進課 課長 水野　清志　　介護保険課 課長 倉知　佐百合　地域包括ケア推進課 福祉政策係 係長 社本　里美　　介護保険課 保険資格係 係長 丹羽　雄己　　地域包括ケア推進課 福祉政策係 主査 櫻井　克匡　　小牧市社会福祉協議会 地域福祉課 課長 池谷　基善　　小牧市社会福祉協議会 地域福祉課 地域係長 石附　こずえ　小牧市社会福祉協議会 地域福祉課
傍 聴 者	０名
配付資料	資料１　　小牧市地域包括ケア推進計画策定委員会設置要綱 資料２　　委員名簿 資料３　　地域福祉や高齢者福祉に関する市民意識調査結果の概要 資料４　　小牧市地域包括ケア推進計画概要（案） 資料５　　小牧市地域包括ケア推進計画　理念について 参考資料　第２回小牧市地域包括ケア推進計画策定委員会　意見交換会まとめ

当　　日 配布資料	・配席表 ・小牧市地域包括ケア推進計画の策定スケジュール ・本委員会の構成について ・地域福祉や高齢者福祉に関する市民意識調査結果報告書

１．開会

２．議題

（１）地域福祉や高齢者福祉に関する市民意識調査結果の概要

・事務局より、資料３（地域福祉や高齢者福祉に関する市民意識調査結果の概要）を用いて説明。質疑、主な意見は以下の通り。

鳥居委員）

市民意識調査について、対象者が年齢で区分けして調査されておりますが、外国人の方に対しても、アンケートの対象としているのでしょうか。市内の外国人の方は増えておりまして、その方たちの視点も知りたいと思います。外国人の方の回答が入っているのかどうかお聞きしたいと思います。

事務局）

無作為の抽出により、アンケート調査を実施しておりまして、その中には外国人の方も含めています。数にいたしますと約 7%の外国人の方が含まれておりました。

長岩会長）

調査の対象者数の中に約 7%の外国人の方がいらっしゃったということですが、回答した方の中に何人いたのかは分からないということですか。

事務局）

回答された方の中の割合は把握できておりません。

長岩会長）

極端なことを言うと、調査用紙が届いたけれども、意味が分からなかったので出さなかったという方も、相当いるかもしれないということですね。市役所に来てどうやって答えればよいのか尋ねながらお答えになった方もいるだろうと思いますが、実態は分からないということのようです。

河内委員）

障がい者スポーツについてお聞きしたいです。小牧市で障がい者スポーツをやっている団体は、どれぐらい活動しているのでしょうか。

それと、地域共生社会という観点から、地域の多様な主体の交流という部分で、小学生の障がい者スポーツへの参加の意欲が高いと書いてありますが、この障がい者スポーツというのは、高齢者や子どもなど、誰しもができるスポーツというような意味合いで「生涯スポーツ」ではないかと思います。

自分も今、地域のスポーツ振興会の活動でボッチャやディスコンなどをやっていまして、高齢者と地域の若い人たちと子どもたちが一緒に遊んだりしていますが、そういった交流の活動と、障がい者の方がやっているスポーツは違うと思うので、小牧市でどれぐらい障がい者スポ

ーツが行われているのかを知りたいです。

長岩会長）

小中学生の意識調査の中で一定数の児童生徒が障がい者スポーツを体験をしている事実が見えたということや、参加したいという小学生・中学生の比率が紹介されて、調査から見える課題の中には、参加意向も高いという記載がありますが、実態としてどれぐらい障がい者スポーツが行われているのかというのは、回答は難しいですか。

事務局）

障がい者スポーツの実態については当課としては把握しておりません。

参加意向が高いという状況については、オリンピック・パラリンピックの開催であったり、パラスポーツの中で、有名な日本人の選手なども大勢出てきているというところもありまして小中学生への影響も大きいのではないかと認識しているところでございます。また、過去に小牧市でも、車椅子ツインバスケットボール大会の全国大会が開かれていたということもありまして、小中学生の意識も高いのではないかと認識しているところです。

長岩会長）

河内委員のご発言の「障がいスポーツ」は、どのライフステージでも、スポーツができる機会が確保されているという意味の「生涯スポーツ」ではないかということについてはいかがですか。

事務局）

「生涯スポーツ」に関しましては、例えば老人クラブなどで高齢者の方は、グランドゴルフはもちろんですが、ボッチャなどにも関心があるということもお聞きしているところでございます。年齢を問わずに生涯にわたってスポーツに携わっていくということは、非常に重要なことだとは考えております。

河内委員）

やはり地域の交流を考えたときに、障がい者スポーツを生涯スポーツとしてとらえて、子どもから、その親の世代や、高齢者までみんなで一緒に取り組める、そういった取り組みが充実するとよいと思います。スポーツ振興会などが主体になることもあると思います。

長岩会長）

障がいのある方が若い頃からスポーツ活動に参加して、年齢を重ねても引き続き参加できるような競技の普及なども「生涯」という意味にもなるでしょうし、この計画は高齢者福祉分野の計画も含まれていますので、生きがいづくりという側面で、その気になればスポーツをする機会がずっとあるというような場所が必要でしょうから、このことも計画の中にどう入れていくかというのが一つのテーマになるかなと思います。

鈴木委員）

近所の大人があいさつしてくれるかの項目の部分で、「あいさつ程度はしてくれる」という数値と「あいさつしたり、気軽に話しかけたりしてくれる」という数値を合わせて９割ぐらいの子どもがそうだというふうに答えているのは意外と大きいと感じました。また、事務局の方が「あいさつしたり、気軽に話しかけたりしてくれる」というところに注目しているのは、あいさつだけの関係性ではなくてもう少し、どこの誰かが分かり、悩み事を相談したりできるような、地域の大人ともう少し密な関係になることを期待しているからではないかと感じました。

長岩会長）

地域福祉を推進しようと考えたときに、あまりプライベートの中に踏み込まないようにという風潮もある中で、この調査結果が本当に実態を反映しているのであれば、まだまだ地域のつ

ながりが保てているという感じもします。

橋本委員）

これから若い人たちが、いかに今後活動してくれるかというところへの期待がありまして、時間があれば、お子さんと交わる機会を設けています。今お話のあったように、あいさつだけではなくて、どこの子で、何歳になったのかなどできるだけ目線を低くしてお話をさせていただいています。子どもと交流できる機会を設けようと、神社のお祭りの支援活動もやっております。５年ほどお子さんの成長を見ていますと、ほとんどどこの家庭の子どもかも分かってまいりまして、お話のできる機会が多くなってきました。

ただ、子どもと面談する機会が非常に限られておりますので、登下校の見守りのボランティアの方とも、どうやって関わるとよいかを話し合っています。地域３あい事業や高齢者サロン、老人クラブなどの活動と合わせてできるだけ積極的に子どもと関わる取り組みをしていきたいと思っておりますが、関わっているボランティアが一部の方に限定されているので、本当に実現できるのかは疑問に思っているところであります。

橋本委員）

高齢化が進む中、健康で長生きしたいというという思いはだれしもが持つなかで、在宅で介護を受けながら生活を送りたいという方は多いという結果になっています。在宅で介護を受けるときに問題となるのが、介護を受ける側のモラルの低さだと思います。少し前に実習程度ですが訪問介護という形で高齢の方や障がいの方の介護をしていたことがありましたが、そのときに利用者から介護スタッフへのハラスメントのような場面がありました。介護スタッフがルールを守りながら、範囲内で最大限の支援をしているのであれば、受ける方も節度のある態度をとらないといけないと思います。そのような問題に対応する制度をつくることはできるものなのかお尋ねします。

長岩会長）

介護職員による利用者へのハラスメントではなく、利用者による介護職員に対するいわゆるカスタマーハラスメントと呼ばれる問題の話ですね。それが理由で介護職員がやめてしまうという報道もかつてありました。調査結果の中では、介護保険認定者実態調査や、介護保険事業所調査にもそのあたりの記載がありました。

永平委員）

今お聞きしたようなケースは、現在の自分のケースではありませんが、精神的に問題を抱えていると思われる方は医療機関に相談させていただいています。実態調査に関する意見としては、やはり介護はお金がかかるので、精神的に家族も本人も負担を抱えているケースが多いのではないかと思います。

江口委員）

いろんな方がいらっしゃるので、施設でもなかなか難しい場面もあるのが現状です。訪問介護も行っていますが、10 軒のお宅に訪問すると 10 通りのやり方があると感じます。施設でしたら、施設のやり方はある程度同じになりますので、在宅だと難しい部分もあると思います。心を痛める職員もゼロではないなか、私たちができることは精一杯やっていきますが、制度という意味では難しい部分はあるのではないかと思います。ただ、そのようなご意見をおっしゃっていただけることが救いだと感じます。また、そういう声があるということを職員に届けることが職員のやりがいになりますので、ありがたいと思います。

小木曽委員）

障がい者の方からの相談の中で、ヘルパーを利用しているという方や 8050 問題のような障が

いのある方と高齢の方の世帯への支援も多くありまして、ヘルパーに来ていただけて、支援をしていただけて、事業者にも市にも感謝したいという話は多々お聞きする一方、一部の方で、私たち支援者や家族、行政機関の方に対して、「虐待や差別を受けている」というようなことを言われる方はいらっしゃいます。施設職員の方やヘルパーさんが病んでしまい、事業所からの支援ができなくなり、転々と事業所を変わるという方もいらっしゃいます。そういう方は最終的に、適切なケアが受けられないという不利益を被ることもあるのですが、そのことが理解をいただけず、クレームに発展し、事業所に対して攻撃が向かうというようなことは行政機関や事業所も受けていることだと思います。そのような方に対しては、市や県や事業所がある程度のルールを説明して、ただクレームを言うだけということとは違うのではないかということを示すことも必要なのではないかということを相談員として、事業所として思います。

長岩会長）

この問題は昔からあったことかもしれませんが、最近、表沙汰になってきていることではあります。これが介護人材の確保や離職に大きな影響をもたらしているのだとすれば、このことも意識しておかないといけないと思いますが、なかなか制度としてどうこうというのは、現実的には難しいような気がするので、相談体制や相談窓口をきちんとつくることなどに、関連づけができるのではないかと思います。

小林委員）

私の感じたところは、社会福祉協議会、地域包括支援センターの認知度という項目で、「知っている」という言葉と「名前は聞いたことがある」と言葉を含めて認知度という理解をしていますが、やはり「知っている」というところが大事だと思います。特にこの２つの機関は非常に重要な機関ですので、65 歳以上の高齢者の方が、認知度でいうならば、80％ぐらいは少なくとも知っている状況が望ましいと思いました。

長岩会長）

せっかく市内に様々な機関があるので、認知度も高めて、それぞれ利用してもらおうということでこの指標が、出ていると思います。さすがに小中学生で、よく知っている方はあまりいないと思いますが、このあたりも計画の中で、何％まで上げていくというような数値目標を掲げてもいいのではないかと考えます。現状として、他市と比べても小牧市は、地域包括支援センターの認知度は高く、それほど見劣りはしないと思いますが、その辺りも今後、協議していければと思います。

大野委員）

本日初めてこの会議に参加させていただきました。皆様のご意見を伺って、いろいろなことに真剣に取り組んでいらっしゃると感じました。

長岩会長）

また次回以降、ご意見を伺いたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

山本委員）

このアンケートの中で小中学生の意識が意外と高かったことと、高齢者の方も意識が高いですが、私世代の子育て世代や働き世代である 16 歳から 64 歳の、アンケートの回答率がすごく低いことが気になりました。分厚い冊子で送られてくると思うので、忙しいこともあり、なかなか回答する時間もなかったのかなと思いました。子どもたちと高齢者が意識しているのに、その間にいる人が意識していないとなると、これからいろいろなことをしていくのに難しいの

かなと感じました。今、コロナも落ちついてきたので、小学生は、高齢者疑似体験など生活に不便を感じている方の体験をする機会があると思いますが、保護者たちも体験する機会があるといいと思います。中学校のＰＴＡにも参加していますが、ＰＴＡ活動もスポーツも年齢に関係なく関われるような機会が、少しでも増えていけば、暮らしやすい地域づくりが身近になってくると思います。すぐには無理だと思いますが、1 番分かりやすいスポーツをする機会をつくったり、あいさつ運動を年 2 回行っているものを、毎月、みんなが意識的にあいさつする日を決めたりするなどできるといいのかなと思いました。

長岩会長）

市民意識調査の回収率は、前回も今回と同じ程度ですか。36.9%は高いとは言えないと思いますが。

事務局）

今回の市民意識調査は 64 歳までの方が対象ですが、前回の地域福祉計画の調査は 65 歳以上の方も対象としていましたので、高齢者の方が含まれている分だけ前回の方が高くなっております。

長岩会長）

ぜひお時間のある範囲で報告書をお目通しいただいて、また次回のところでもご意見を続けてお寄せいただければと思います。例えば老老介護の実態などは非常に顕著に結果が出ているように思います。介護保険認定者実態調査の結果では、単身世帯が 27%で、夫婦のみ世帯が 32.2%ですから約６割がお一人暮らしかご夫婦のみということになります。もちろん近くにお子さんがいらっしゃったりするケースも入っていると思いますが、約６割というと、結構大きい数字だと感じました。

また、せっかく災害時避難行動要支援者支援の制度がありますが、登録している方が 13.3%ですから余り普及してないということもあります。最近も多く水害や地震が発生していますが、適切なタイミングで周知を一気に行って登録者を増やすということをしないと、なかなか増えてかないのではないかという感じもいたします。

（２）小牧市地域包括ケア推進計画の概要（案）

・事務局より、資料４（小牧市地域包括ケア推進計画概要（案））と資料５（小牧市地域包括ケア推進計画　理念について）を用いて説明。質疑、主な意見は以下の通り。

鳥居委員）

おおむね案のとおりでいいと思います。ただ、超高齢社会と書いてありますが、それ以外にも人口減少社会ということも問題になっています。その視点もしっかりと入れていかないと、超高齢社会だからといって、高齢者の施設をたくさんつくるのはよいのですが、その 10 年後には施設が必要なくなってしまうということも考えられますので、そういうことも踏まえて検討していく必要があると思います。また、これだけ燃料が高騰し、電気・水道代も上がった中で、山間部など地方で高齢者サービスを営んでいる企業は廃業されているところも結構多いと聞いております。少数の人たちに対応するために、遠くまで車で運ぶことを考えると採算が合わないということだと思います。小牧市はまだ、多くの方がみえるのですぐにそのようなことはないのかもしれませんが、岐阜県や長野県などの、山間部のほうでは、厳しいというようなこともありますので、やっぱり今の経済状態や社会情勢をもう少し踏まえて考えていくということが大事なことだと思います。

また、このキャッチコピーについてですが、私も当時、第３次小牧市地域福祉計画の策定に委員として参加していました。この中の「あなたが主役」という文言ですが、先ほどの調査結果の概要に出ていたように、市民の皆さんが主体的に動いていただくことが大事だということで、皆さんが主役としてやっていただきたいという希望を込めて意見を出したと記憶しています。

そのとおりになっていないのが現実で、やはり市民の皆さんが自ら参加することが少ない状況です。どうしたら、みんなが自分たちのまちを自分たちでつくろうと思えるかを考えていくことを思うと、「あなたが主役」という言葉を残していただきたいなと思います。

長岩会長）

小牧市はこれから高齢化率が上がっていくと思いますが、全国的に言えば、すでにピークを迎えて、あるいはピークを終えて、介護事業の必要数も減っていくという地域も確かにありますので、そのことも念頭に置いておかないといけないと思います。今後 3 年～10 年ぐらいまではまだ小牧市は、必要だろうとは思います。

三島委員）

今回の計画は、様々な計画を合体させるということで、ボリュームがあり大変だなと感じています。また、具体的なことがなかなかこういう理念の中では見づらいと思います。キャッチコピーの案もリズミカルで素敵だと思いますが、現実的なことを考えたときに、先ほどの山本委員のご発言にもあったように、8050 問題などに代表されるような、子どもと高齢者の中間の世代の方へのアプローチが出来たほうが子育てに関しても、高齢者の介護に関してもいいと思います。中間の世代の方にも、いずれ自分が高齢者になったときのことを考えていただけるような計画になっていくといいのかなと思っております。

石田委員）

私も通常業務を行っているときに患者様に、介護保険を利用されていますかと声をかけることもありますが、介護という言葉に対して抵抗がある方、私は介護を受けたくないという方も一部いらっしゃると思うので、そういう方にも手助けしてあげるためにはどうしたらいいのかということを日々考えています。介護に対して、負のイメージを持っている方に対して、どのようにその意識を変えてあげられるかということで、昨年、北里地域包括支援センターの職員さんを薬局に招き、薬局の健康相談会という形で介護やＡＣＰについて講義をしていただいて、「介護ってこういうものなんだね」と地域の患者様に、理解してもらう機会をつくりました。つながりをもって、市民の皆様の理解を深めてもらうということが大切なのかなと思います。また、「地域包括」というからには、やはり私たち事業所が手を取り合って、住民の方々に貢献出来たらよいと思いますので、一つの事業所だけで実施するというよりは、いろんな事業者が顔を合わせる機会をもっと多く設けるとよいと思いました。今日のような会議の場は代表者がお話する機会ではありますが、別のスタッフとも交流できる機会が多くあればよいと思いました。

理念の言葉については、基本理念のところで「地域共生社会の実現を目指す」とありまして、住民一人ひとりが役割を持つということも重要視されていると思いますので、鳥居委員がおっしゃったように、「あなたが主役」という言葉は私も必要なのかなと感じました。

長岩会長）

まだまだ要介護についてのマイナスイメージがあると思います。要介護になりたくないとい

う気持ちは健康を維持するためのモチベーションにもなると思いますが、一方で要介護になった人が負け組で、元気でいる時間が長く寿命で突然亡くなる人が勝ち組のような価値観は必ずしもよろしくないように思います。特に認知症については相当啓発活動をしていかないと、偏見や差別が根強くあると思いますので、啓発についても当然計画の中に入れていく必要があると感じております。

長岩会長）

介護保険認定者実態調査の結果では、単身世帯が 27%で、夫婦のみ世帯が 32.2%であり、約 6 割がお一人暮らしかご夫婦のみという結果が出ていますが、実感としてはどうですか。

前川委員）

数字に出てこないかもしれませんが、90 歳代の方を 70 歳代の息子さんが介護しているという方もいらっしゃるので、必ずしもご夫婦でなくても老老介護をされているケースもあると思います。

河内委員）

認知症や、介護保険などのことを知らない人が多いと感じています。介護が必要になったとき、障がいをもったときに、介護保険等の申請をするということになったとして、申請したら何でもできると思い込んでいる方が多いと思います。そういった人たちに対しての理解を求めるための、システムをつくろうというようなことは、別の会議で話がありました。本人だけではなくて本人を支えていく自分たち中間の世代の理解がされていないということが問題としてあがっておりましたので、高齢者と、子どもだけではなくて中間の世代がどうやって地域の活動や医療・介護に目を向けていくのかを今後考えていく必要があると思います。

田中副会長）

今回様々な項目でアンケート調査をすることで、今までの第３次小牧市地域福祉計画の洗い出しが出来たのかなと思っています。

例えば、時代背景として、介護している人が、配偶者から子どもに変わってきたということや、若い世代の参加がなかなか得られないということ、子ども会の行事に中学生がなかなか関わっていないなどのことがアンケートの中でみられました。それからカスタマーハラスメントの問題もありました。

今回の地域包括ケア推進計画は、そういったような時代背景が最近かなり変わってきたということも踏まえてつくっていかなければならない非常に難しい面があるということを思っています。また、コロナの影響がかなりあり、そういった状況に拍車をかけていますので、コロナ禍で出てきた課題にも、目を向けていかないといけないのかなと思います。

逆にコロナで、つながりの必要性という部分が、すごくはっきりと見えてきたと思います。第３次小牧市地域福祉計画の中で実施してきた高齢者サロンや災害時避難行動要支援者の対応などは小牧市は重点的に実施してきていますし、それぞれの団体の皆さんに頑張っていただいています。また地域包括支援センターの認知等が上がっているということは、地域の中での専門職の方の丁寧な気配りが表れてきていると思っています。

そういったことから培ったつながりと仕組みをしっかりと生かしながら、今度はそこに、地域性を考慮したり、障がい者の方などが地域の中に見えますので、そういった方々にどう対応していくのかということでの、多職種連携的なところ、多角的な対応という部分を入れていくことになると思います。

全ての地域福祉計画、老人福祉計画、介護保険事業計画、そして再犯防止計画が、今日のお話の中で皆さんつながりがあるということはお分かりいただけたかなと思います。鳥居委員が言われた、「自分たちが主役なんだ」ということを、それぞれの機関に思っていただくことが、この計画を動かしていく原動力になるのだなと思いました。

次回から具体的な計画づくりに入っていくと思っています。皆さんにもご負担をおかけすると思いますが、小牧市の計画づくりへの期待度が高まったなと、いいスタートが切れたと思っていますので、今後ともよろしくお願いしたいと思います。

長岩会長）

コロナも世間ではアフターコロナということで進められていますが、世間相場と事業者の方々の感覚が少し違うのではないかという感じもしますので、この計画は本当のアフターコロナという立ち位置でいいのか、ウイズコロナという意識でつくっていかないといけないのかも考えていく必要があると思います。

前回の計画も前々回の計画も、介護人材に関しては継続して問題とされていまして、各事業所で頑張っていますが、どんどん深刻になってきている中で、行政計画として何が打ち出せるのかというところは我々にアイデアがないと何も盛り込めませんので、その辺りも後ほど、意見を出していければと考えております。

３．その他

事務局）

・委員会の議事録（案）作成後、委員の皆さまにご確認いただく。

・会議スケジュールを確認し、介護保険事業計画策定にあたっては、部会を設け、一部の委員と春日井保健所の方に参加いただきながら同日の会議の中で、前半を地域包括ケア推進計画の会議、後半を介護保険事業計画策定部会として実施することを報告。

・次回の会議は令和５年８月１７日に開催予定。

４．閉会